
広い視野と人脈を得た1年間

第二期生 上門 充 (京都第一赤十字病院 地域医療連携室 課長)

履修を決めたときの私は、担当していた地域医療連携と災害救護事業で多くの課題を抱えて悩んでいました。きつと、働きながら大学に通う大変さや不安以上に、「安寧の都市ユニットで学びたい」という気持ちが強かったのだと思います。

その後、履修が決定し、4月からの新しい生活に思いをはせていた矢先に東日本大震災が起きました。DMAT(災害派遣医療チーム)だった私は、発災直後に現場に派遣され、職場に戻ってからも実務に忙殺されることになってしまいました。

出鼻をくじかれたかたちで始まった安寧の都市ユニットの履修ですが、東日本大震災直後だからこそ、有意義だったこともあります。

それは、災害医療、初動救護の視点だけでは解決できない大規模災害現場を目の当たりにしたあと、各分野の先生方や受講生の活動報告を聞き、意見交換をするなかで、多様な視点(考え方)の大切さを実感できたことです。

「視点を変えて考える」ことの重要性はわかっているけど、自分の経験や考え方に邪魔をされていました。ビジネスの場ではなく)学びの場で異業種交流ができたことにより、変わっていく自分を感じることができました。履修後も、違う分野で活動しているみなさまのお考えを直接に聞ける環境にあることが、私の財産になっています。

これからも本ユニットでの経験をいかし、特定の分野にとらわれることなく、多様な分野で活動しながら、「安寧の都市」の実現をめざしたいと考えています。

安寧の都市クリエイターを志す社会人として

第二期生 瀧口 康司 (西日本電信電話株式会社)

安寧の都市ユニットでは、毎週水曜日の工学研究科拠点(桂)、医学研究科拠点(吉田)での履修に加えて、土井勉先生主催のフィールド学習で現地(神戸松本せせらぎ通り、大阪からほり〜北浜テラス等)におもむき、安寧の都市について考え、体得することができた。

実践プロジェクトでは、クライシスマネジメントチームに所属した。三谷智子先生、小山真紀先生、孔相権先生、今村行雄先生、村上由希先生、前期までは第一期生の先輩(大田さん、濱田さん、古橋さん)と、同期メンバー(上門さん、弓岡さん、米澤さん)で、各自の取り組みと、なによりも熱い思いをもち寄った。先生や先輩からの助言、メンバーとのディスカッション、執筆活動を通じて、毎週土曜日は、杉浦地域医療研究センター1階の教員居室で、充実した「クライシス

ゼミ」を過ごすことができた。

成果として、「災害時における情報伝達手段の提案——絶望期からの早期脱出に向けて」を取りまとめ、安寧賞を受賞できた(本内容は、第18回日本集団災害医学会総会・学術集会(2013年1月18日)にて発表)。

修了後の活動として、小山先生、古橋先輩、上門さんと京都府(政策企画部情報政策課)で取り組まれていた、京都府庁内ベンチャー事業の研究「防災を考慮した次世代の戦略的情報発信——日常情報から災害情報まで、府民・観光客への“到達率”をアップする」に参画し、京都市市事業、京都の観光防災情報を多言語で提供する「スマートフォンアプリ(KYOTO Trip+)」の実証運用に携わらせていただいた。

社会人学生として1年間、教員のみならず、諸先輩方、同期とともに安寧の都市について学んださまざまな学問領域を糧として、今後、理想的な安寧の都市を創造する安寧の都市クリエイターとして、安心・安全で健康なまちづくりを担っていきたくと考えている。

*総務省「地域経営型包括支援クラウドモデル構築事業」開発実証団体の選定を受けて実施。

平時の地域力を有事につなげられる地域へ

第二期生 樋口博紀(京都市東山区役所 地域防災係長)

私は、安寧の都市クリエイターの称号を得た翌月の人事異動によって、初めて防災の業務に就きました。行政職員でありながら、市民と接する仕事に就くことがなかった私が、これまで以上に「安寧」を意識しながら仕事をするようになったことはいうまでもありません。

さて、防災に携わってみると、誰にとっても必要なはずの防災対策が、なぜか多くの方にとって「わがこと」ではないことを認識します。さらには、災害時になると行政に過度な期待を寄せ、命まで預けようとする方もいますが、とても無謀な話です。

防災ではよく、「自助・共助・公助」といわれます。そのうちの自助と共助は、日々の生活のなかで培われるものだと思います。たとえば、「家を整理整頓していたからケガすることなくスムーズに避難ができた」、「いつも地域行事に参加していたから、災害時にもご近所で助けあうことができた」といったように多くのことが防災につながっています。そうした視点に気づいてもらい、防災を身近に感じてもらうことも、公助の役割であるように思います。

どんなに備えていても大規模災害が発生すれば、生活になんらかの支障をきたします。そんなときこそ、地域のつながりが困難を乗り越える力になるはずで、平時から、みなで助けあえる地域をつくることで、地域防災力もそなわり、「安寧の都市」に近づくのではないのでしょうか。